

8/19 日福

語り継ぐ

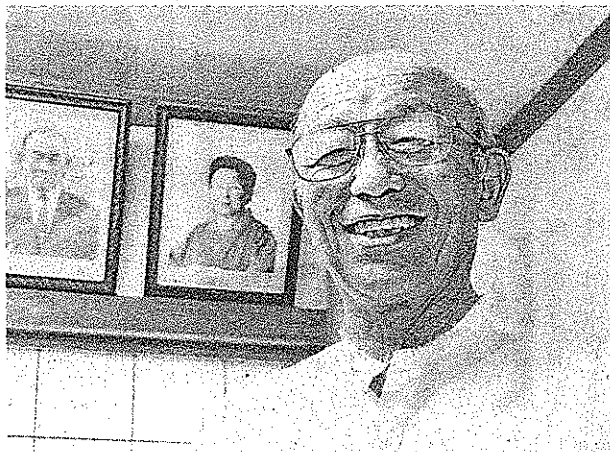
2016 ふくい

語りぬ父異常な戦争

和三年から四五年の終戦まで、徴兵で何度も中甸や朝鮮半島の戦線に行った。連隊名など、詳しくは知らされていない。母にだけは語ったのかもしれないが、子どもたちにはしゃべらなかつた。

戦争体験について、父は一度も話さなかつた。子どもも面倒をよく見る、大好きだった父。人付き合いのよい、家庭的な人だった。けれども、戦争のことは一切口をつぐんだ。
福井市光陽四丁目の建築士、由田昭治さん(74)の父大相さんは、一九二八(昭

由田 昭治さん(74)＝福井市



両親の写真を背に思いを語る由田昭治さん＝福井市光陽4丁目で

う無言の主張を感じた。母や姉からは、戦争の体験を聞いたことがあつた。四五年七月の福井空襲で焼

け出され、二日や三日にと知人の家を頼って泊めてもらったという。自身は三歳。かすかにひもじかつた思い出が残る。

牛小屋のような小屋で生活した記憶もある。母や姉は、食べものにすら苦労したという。それでも母から、愚痴を聞いたことはない。「仕方ないんや。自分らだけでないんやから」。母は淡々と経験を振り返つた。

母と異なる父の対応。それはなぜか。今はこう推測する。母は純粋な被害者だったが、戦地で戦つた父は加害者の面もあつた。それも命令された不本意な形で。だから、しゃべりたくなかつたのではないか。「子どもが聞くのとはばか

るようなことをさせるのが戦争。よっぽど異常なことだと思つた」

父は七二年に六十五歳で亡くなった。当時は平和の問題に興味はなかつた。言いたくないのなら、と無理に聞くこともなかつた。だが、今だったら、父に少し我慢してもらつて、戦争のことを聞いてみたいと思つた。安全保障関連法をきつかに数年前から、日本の世相に危機感を抱き、平和問題や憲法九条に興味を持つようになったからだ。

講師を務める親子向け自然エネルギー体験教室で「戦争は人を殺し、物を壊すうえに、環境にとつても最も悪いもの」と伝えるようにはしている。だが、自

身は戦争を知らない。

父が姉にだけ語つた言葉がある。「戦争は人間性を無視するもんや。でもそんな戦争も、最後の最後は人間性なんや」。父はどんなことをしたのか。中国や朝鮮半島で何を見聞きして、そう思つたのか。「あのとき聞いておけば」。優しく笑つた父の遺影を見つめ、今も自問する。

(藤共生)

◇ 終戦から十五日で七十一年が経過する。戦争を体験した人たちが年々少なくなつていく中、戦争の悲惨さや平和の尊さをどう語り継いでいったらいいのだろうか。親が戦争を体験した人たちの思いを探つた。